



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3421 号 2016.12.24 発行

多様な人の関わりを 共同子育てが共感性培う 生物学からみたニンゲン子育て考 (上)

琉球新報 2016年12月10日

厳しさを増す現代の子育て環境について、霊長類学や進化学といった生物系分野の研究者の発言が相次いでいる。長い時間をかけて進化してきた人間は、どのように生き、子どもを育ててきたのか。それに照らして現代の子育てはどのような状況にあるのか。来し方を見直すと今後へのヒントが見える。初回はアフリカ各地でゴリラの観察を続け「霊長類を通して人間を知る」と話す京都大総長の山極寿一さんに聞いた。(黒田華)



「人間は長い子育てによってみんながつながれる」と語る山極寿一氏＝11月25日、大阪市の大阪府立国際会議場

一人間の子育ての特徴は。

「ゴリラは雄が体重200キロにもなるが、子どもは2キロ弱。母親は赤ん坊を1年間抱いて過ごし、3年間はお乳を与える。人間の赤ん坊は3キロもあるが、ひ弱で母親につかまることができない。離乳は約1年と早い。永久歯が生える6～7歳まで他の霊長類にはない乳歯の時期がある。つまり離乳すべきでない時期にお乳なしで育てる必要があり、農耕以前の時代には子ども用の特別な果物などを手間を掛けて集めた。この早い離乳と遅い成長のため人間は長期の保育が必要になる。母親だけでは無理で、多くの人でこの時期を支えなければ子は育たない」

―泣き声も大きく母親たちを悩ませる。

「赤ん坊は母親につかまることができないため、母親はすぐ赤ん坊を手から離してしまう。だから赤ん坊は大声で泣いて自己主張する。肉食獣を引き寄せないよう親に限らず誰かが泣きやませようと世話をする。すると赤ん坊はにっこり笑って世話をする人をさらに引き付ける。人間の子は多くの人によって共同保育されるよう生まれている」

「人間の子育ては20年近くもかかる。長期の共同子育てを通して人間はつながりを深め、人間の特徴である共感性を高めてきた」

―昔の地域共同体も今はない。どのような子育て環境をつくっていくべきか。

「子どもの目線に立ち、生物学的な特徴に合わせた社会をつくるのが自然だ。必要なのは長い離乳期に安心・安全な環境をつくること。母親だけでは無理。人間の子は味、言葉、ものの名前とたくさん覚える。あらゆる外部を身体を使って覚えていくためには、母親や保育士だけでなく多様な人の関わりが必要だ」

「人間は12歳くらいで脳の成長が止まり、身体の急激な成長が始まる。この時期に親以外の他者との信頼関係をつくって人間社会の仕組みを知り、性の世界に入っていく。心身のバランスが変わる思春期は、どの地域・文化でも死亡率の高い危険な時期だ。乗り切るには経験者の適切なアドバイスがいる。生まれ育った地域で誰もが持っている社会資本を見直し、地域の行事や地域の人たちが一緒に過ごす場をもっと増やすといい。言葉だけでなく、経験を共有するコミュニティーが必要だ。そこにICTも活用できる」

「子どもにとっての安心は信頼する人がそばにいること。時間をかけることをコストと考えるのではなく、一緒にいる時間に価値があると認識を変える必要がある。経済優先から社会優先に価値観を転換すべきだ」

～ プロフィール ～ 山極寿一（やまぎわ・じゅいち） 1952年東京出身。京大大学院博士課程修了。専門は人類学、霊長類学。ゴリラの野外研究を進めてゴリラの社会進化と生態学的適応、家族の起源などを研究する。2014年から現職。著書に「戦争の起源」「家族進化論」ほか多数。

公共政策で親支援を 進化の視点、虐待防止に 生物学からみたニンゲン子育て考（中）



琉球新報 2016年12月17日

子ども虐待の通告件数は増え続け、死亡事件も減らない。子ども虐待や現在の子育て環境について、動物の行動がなぜそのように進化してきたのかを探る行動生態学の視点で暴力や子殺しを研究する国立大学法人総合研究大学院大学（神奈川県）の長谷川真理子教授に聞いた。長谷川さんは「発生メカニズムを冷静に見詰めることで、あるべき社会を考えられる」と語った。（黒田華）

「人間がどんな生物かを知った上で社会のありようを考える必要がある」と語る長谷川真理子教授（総合研究大学院大学提供）

—子殺しとは何か。

「生物は、生存率を上げ、多くの子どもを残すように進化してきた。複数回繁殖する動物は、現時点の子育てがうまくいきそうになく、次の繁殖のチャンスが確実にある場合には、現在の子を殺したり遺棄したりすることがある。ネズミのメスは妊娠中に父親以外のオスの臭いをかぐと流産する。ライオンやラングールというサルの仲間は、グループのボスであるオスが交代した時、新しいオスは前のオスの子を殺し、自分の子を産ませる」

—人間の子ども虐待は。

「虐待死事例を分析すると、死亡児は1歳未満が多かった。養育者が一般より若く、経済的に困難で、子どもと血縁関係のないパートナーと同居している時に虐待のリスクが上がった」

「人間の子育てには多大な世話が必要だ。特に母親が若く、小さい子を連れて新しいパートナーと一緒になった場合、その子を育てる環境が良くなく、新しいパートナーとの子育てが可能なら、前の父親の子に対して残酷になり得る。新しいパートナーにとって子どもは自分の血縁ではなく、愛情のスイッチが入りにくい。その子がいなくなることで自分の子をつくる可能性が上がるなら、子どもに優先順位を付けることはある。倫理的には許されないが、進化生物学的にはそのような選択肢があり得ると理解すべきだ」

—低所得のリスクとは。

「人間は離乳までの期間はゴリラなど類人猿よりも短い。類人猿が離乳後は独立して採食や移動するのに対し、人間は離乳後も多大な世話がいる。また相対的に大きな脳を成長・維持するためには多くのエネルギーが必要で、血縁、非血縁を含むたくさんの人が子育てに関わる必要がある。そもそも人間は1人では狩猟も農耕もできず食料を獲得できない。生きるために人と協力しなければならない」

「現代社会も仕事を分担して共同しているが、人のつながりの代わりに貨幣が介在し、何をすることも貨幣が必要になった。保育所など子育てに必要な資源にさえ金銭が必要で、経済的困窮は大変なハンディとなる。母親たちが友人同士で助け合う動きもあるが、つながりのない人は輪に入れない。財政基盤を伴う公共政策として親を支えるシステムをつくる必要がある」

—生物の視点から人間社会を見る意義は。

「人間がどんな生物かを進化的に解き明かし、本来の生活の仕方を理解する必要がある。人間は繁殖する前の若い世代や、繁殖を終えた世代、血縁のない大人も関わって、非常に大きな世話を必要とする子育てを支えてきた共同繁殖の種だ。母親だけ、両親だけでは絶対に完結できない。この大前提から社会を再構築する必要がある。虐待する親を『鬼のようだ』と非難するだけでは何も解決しない」

～ プロフィール ～ 長谷川真理子（はせがわ・まりこ） 1952年東京都出身。東京大大学院博士課程終了。専門は行動生態学、進化生物学。野生動物の研究を経て人間の進化と適応を研究する。2006年より現職。日本人間行動進化学会副会長。著書に「クジャクの雄はなぜ美しい?」「進化とは何だろうか」ほか多数。

人の原点は共同繁殖 家族維持できる社会転換を 生物学からみたニンゲン子育て考（下）

琉球新報 2016年12月24日

親子を支援する臨床現場ではどのような家族の問題が見え、生物学の視点から見直すことにどんな意義があるのか。行動進化学を学んだ後に心理分野に進み「虐待や居所不明児問題は、子どもを尊重してこなかった社会の問題」との主張を続ける山梨県立大学福祉コミュニティ学科長の西澤哲教授に聞いた。（黒田華）

山梨県立大学人間福祉学部福祉コミュニティ学科教授で、日本子ども虐待防止学会理事の西澤哲氏＝大阪市の大阪府立国際会議場

―池田小事件、大阪市の2児遺棄致死事件などの加害者の心理鑑定を担当した。重大事件から何が見えるか。

「加害者自身が激しい虐待を受けて育っている。また、子どもに激しく固執し、健康な人以上に子どもに意味付けをする傾向がある。虐待を受け、虐待をする親の世代間連鎖について実証研究すると、関連する因子として（1）自分が受けた虐待を納得しようと合理化する「体罰肯定感」（2）過去の被害感から子どもが自分をばかにしていると感じる「被害的認知」（3）自分と子どもの欲求が対立したときの「自己欲求の優先傾向」―が現れた。中でも子どもの頃に満足しているはずのものが未充足であることによる「自己欲求の優先傾向」の影響が強かった。虐待の本質は乱用性、つまり子どもの存在を利用して親が何かを得ることだ。親自身が満たされていない愛情を子どもに求め、無力感の代償として支配欲求を持つ。親の生育歴やトラウマ（心的外傷）を視野に入れた家族の支援が必要だ」

―なぜこれほど家族の問題が生じているのか。

「今、世界は、すなわち市場だ。社会原理と家族原理が対立する中で生きる意味を利潤追求に見だし、共同体、家族を破壊してきた。特に日本は先進国中でも突出して保育所が多い。子どもの養育よりも仕事を優先してきた。持論だが、日本では家族は一度形成されるとずっと続く感覚があり、家族を維持する努力を怠ってきた。だからお金さえ送ればいいと単身赴任も許される。欧米では家族は日々努力して維持するものという意識があり、単身赴任などを命じたら『家族を破壊する』として訴訟が起きる。家族を維持するために保育所を増やすのではなく、生産性を犠牲にするのを良しとし、社会生活を営みながら家族を維持できる社会への転換が必要だ」

―生物学的な視点が注目されているのはなぜか。

「これまでは（1）情緒的安定（2）夫婦の性的満足（3）子どもの社会化―が家族の三大機能と言われ、社会が変化してもこれだけは残ると言われた。だが現実の家族はさらに多様化し、家庭内で会話がなく安心できず、性産業や不倫で性的欲求を満たし、子育ては保育所などで外注できる。社会学は家族を定義できておらず、行き詰まっている。そこで動物学からのアプローチが脚光を浴びている」

―それでも家族は必要か。



「重大事件の加害者たちは家族を渴望している。家族を求め、母親たちは『いいママになりたい』と言う。彼ら・彼女らの言葉をどう捉えるか。共同繁殖という人間の原点に立ち返り、生物学や人類学的な視点からの異議申し立てに答えていく必要がある。個人が情緒的に結ばれた家族を形成・維持することを可能にする社会制度が必要だ」

～ プロフィール ～ 西澤哲氏 1957年、神戸市出身。サンフランシスコ州立大学大学院教育学部カウンセリング学科修了。専門分野は臨床福祉学、臨床心理学。情緒障害児短期治療施設の心理療法士などを経て現職。日本子ども虐待防止学会理事。著書に「子どもの虐待」「子どものトラウマ」ほか多数。

障害者も舞台楽しんで 五輪・パラリンピックへ 国も予算拡充して支援

東京新聞 2016年12月24日

障害のある人が舞台芸術を鑑賞したり、自分で演じたりするための支援が広がりつつある。知的、発達障害者には、劇場に慣れてもらう体験会を実施。耳が聞こえない人が演技をするための手話通訳の養成講座も開かれている。東京五輪・パラリンピックを見据え、国も障害者の芸術鑑賞や参加支援を予算に盛り込み、後押しする方針だ。

「コンサートが始まる合図です。大きな音がしますよ。鳴ったら明かりが暗くなります」十二月四日、東京都文京区のホールで開かれた知的、発達障害のある子どもらが安心して鑑賞するための「劇場体験プログラム」。はじめに司会者が、開演前のブザー音の理由などについて、約百四十人にゆっくりと語りかけた。

開催に協力した堺市の国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）によると、知的、発達障害のある人は、日常とは違った劇場の音や照明などに過敏に反応し、驚きや不安を感じることがある。だが環境を事前に説明すれば、安心して楽しめる可能性があるという。

この日も、館内を暗くするのは舞台を見えやすくするためで、ブザーが鳴るのは鑑賞の準備のためだと解説。鑑賞中に立ち上がると後ろの人が見えなくなるというマナーも確認した。リラックスのため観客に両手を使って頭上に輪をつくらせ「劇場って楽しい」と声を出して開演を待った。さまざまなジャンルの演奏を約一時間楽しんだ後、知的障害のある小川薫さん（17）は「おもしろかった」と笑顔で話した。

ビッグ・アイでは、障害者向けの手話や点字によるサポートに加え、二〇一四年からこのプログラムを開始。延べ約千九百人が映画や音楽、ミュージカルを体験した。事業プロデューサーの鈴木京子さんは「行きたい劇場に行けるようになれば日常の選択肢が増える」と意義を話す。

知的障害のある長男（13）とプログラムに参加した堺市の高橋沙織さん（44）は「以前は鑑賞中に喜んで跳ねてしまい、冷たい視線を感じることもあったが、鑑賞経験を積んだことで、ちゃんと座って見られるようになった」と喜びを語る。

障害者が演じることを支援する活動も進んできた。NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークは十～十一月に「舞台・演劇における手話通訳養成講座」を開催。受講者は聴覚障害のある役者への適切な通訳の方法を学んだ。

演劇の通訳をしているという受講者の江崎裕子さん（33）は「訳す時、歌詞とリズムのどちらを優先すべきか悩んだが、まず聴覚障害者に聞けばいいと改めて学んだ」と話した。

二〇年の東京五輪・パラリンピックに向け、芸術分野でのこうしたバリアフリー化は課題の一つ。厚生労働省は障害者の鑑賞支援や芸術参加を促進する費用を一七年度予算案で拡充した。超党派の国会議員連盟も、障害者文化芸術推進法案をつくり、成立を目指している。

応援企業表彰、認定ロゴも＝障害者スポーツ振興へー文科省

時事通信 2016年12月24日

文部科学省は、2020年東京パラリンピックに向けて障害者スポーツの振興を図ろうと、競技団体を応援する企業を増やすための仕組みをつくる。どのような支援が求められているか分からず、二の足を踏むケースもあることから、競技団体へのアンケートを通じてニーズを把握。積極的に応援する企業の表彰制度創設や認定ロゴマーク作製などを検討する。リオデジャネイロ・パラリンピックなどにより障害者スポーツへの関心は高まりつつあるが、競技団体の多くは財政面や組織体制が脆弱（ぜいじゃく）。特に認知度の低い競技では、十分な支援を受けられていないという。そこで文科省は10月、検討会を設け、民間による支援の現状や課題、具体的なニーズについて競技団体にアンケートを実施。(1)大会開催や日常活動への金銭的な支援(2)事務局スタッフの派遣といった人的支援—など、要望の多かった項目をリストにまとめた。今後、企業側に周知し、関心を示した企業に個別に支援を働き掛ける。

障害者への理解、絵本で深めて 京都府の鳥・オオミズナギドリ主人公に制作

産経新聞 2016年12月24日

■舞鶴の社福法人・みずなぎ学園

障害者への理解を深めてもらおうと、社会福祉法人みずなぎ学園（舞鶴市鹿原）が絵本「ぬーたんがとぶ日」を制作した。府の鳥・オオミズナギドリの「ぬーたん」を主人公に飛び立つのが苦手でも、助けがあれば飛べることを表現した。同園の鈴木令子園長は『「ぬーたん」と（登場人物の）少年から支え合うことの大切さを感じてほしい』などと話している。

同学園では、知的障害者ら約250人が通所施設や入所施設を利用。「ぬーたん」は利用者の30代の女性が描いた鳥のキャラクター。利用者が刺繍（ししゅう）などをつくる度に「これ縫（ぬ）うたんや」などと話していることにちなみ、キャラクターを「ぬーたん」と命名した。

オオミズナギドリは舞鶴市沖の国の天然記念物・冠島に生息。地面から飛び立つことができず、斜面を走ったり、高い場所から飛び降りたりしないと飛ぶことができないとされる。

絵本では、ハンディキャップのある人を「ぬーたん」に投影。うまく飛べない「ぬーたん」を少年が後押しすることで飛び立つ姿を描く。

職員が物語を考え、利用者が作った刺繍など手芸品の写真を絵本の背景に取り入れた。今年3月ごろに制作を始めたが、今年7月、相模原市で多くの障害者が殺傷される事件が発生。障害者への理解を求めることの重要性を再認識し、制作を急いだという。

絵本はカラー刷りの正方形（縦横21センチ）で1万部を発行。市内の小中学校や幼稚園、保育所などに配布するほか、1部650円で販売する。

問い合わせは同学園（電）0773・63・5030。

ケーキやみかん贈る 佐竹食品、市内福祉施設に 大阪日日新聞 2016年12月24日 梅原社長（中央）と後藤市長（左）からケーキを受け取る子どもたち

福祉施設の子どもや障害者にクリスマスとお正月を楽しんでもらおうと、吹田市朝日町の佐竹食品が同市内の福祉施設などにクリスマスケーキとみかんを贈った。子どもたちは「ありがとうございます」と笑顔でプレゼントを受け取



った。

同社は「地域社会の役に立てれば」と、1983年以来、市内の児童福祉施設や障害者福祉施設に、夏はすいか、冬はクリスマスケーキとみかんを贈っており、今回で34年目となる。

同社の梅原一嘉社長（41）が19日、寄付目録を後藤圭二吹田市長に贈呈。後藤市長からは感謝状が梅原社長に贈られた。その後、市役所正面玄関で、梅原社長と後藤市長が児童養護施設の子どもたちにクリスマスケーキを手渡した。

今回、寄付されたクリスマスケーキとみかんはともに149箱で、市内59カ所の福祉施設に配られる。

梅原さんは「毎年、楽しそうにケーキやみかんを食べている子どもたちの絵や写真、お礼の手紙がたくさん届きうれしく思っています。子どもたちの喜ぶ顔は励みになります。今後も続けていきたい」と話していた。



赤い服集結！ 障害児支援のサンタ500人パレード 松山・大街道

愛媛新聞 2016年12月24日

サンタクロースに扮し商店街を練り歩くパレード参加者

街にサンタが大勢やってきたー。愛媛県松山市周辺のライオンズクラブが23日、大街道商店街など同市中心市街地で、サンタクロースの格好をした会員、家族ら約500人によるパレードを行った。

障害がある子どもらにプレゼントを贈る資金を集めようと、20クラブが合同で実施。参加費や寄付金の一部が、同市や東温市の特別支援学校の子どもたちへのプレゼント購入に充てられる。

内宮参拝 ヘルパー認定79人

読売新聞 2016年12月24日

◆2月から車いす移動有償介助

障害者や高齢者が安心して伊勢神宮内宮（伊勢市）を参拝できるよう、車いすでの移動などを介助する有償サービス「伊勢おもてなしヘルパー」が来年2月、活動を始めることになった。第1期ヘルパーは伊勢市内外の79人。玉砂利の上を1・6キロ往復するなど、車いすでは厳しいお伊勢参りを温かく支援する。（竹本吉弘）

伊勢商工会議所で22日、第1期ヘルパーの認定式が行われた。今年10月から計4回の養成講習で、高齢者や障害者への接し方を学んだり、車いすを介助して玉砂利の上を進む実地研修を受けたりして、第1期ヘルパーとして認定された79人のうち、49人が出席した。

ヘルパーを代表して最年少の伊勢まなび高校1年、下村姓奈さん（15）に、鈴木健一市長から認定証が手渡された。下村さんは「車いすの人を助けたい。もっと多くの人に伊勢を楽しんでほしい」と抱負を語った。

ヘルパーの最高齢は74歳。広島県から都合のつく日だけ参加するという人もいるという。

車いす介助の有償サービスは昨年5月、伊勢市や皇学館大学、市観光協会、NPO法人伊勢志摩バリアフリーツアーズセンター（鳥羽市）などが「伊勢おもてなしヘルパー推進会議」を設立し準備を始めた。

市民団体による無償サポートが希望者に行われているが、依頼の増加に対応しきれなくなっており、いつでも支援できる有償サービスの導入を決めた。

玉砂利の上を車いすで進むのは容易ではない。ヘルパーはタイヤが玉砂利に埋まりにく

い幅広タイプの電動車いすを利用する。ただ、重いため、石段を上がる正宮前では通常の車いすにませ替え、3～4人がかりで担ぎ上げる。

伊勢志摩バリアフリーツアーセンターの理事長、中村元さんは、「ヘルパーが集まるか不安だったが、スタートにこぎつけ、ほっとしている。多くの利用を呼びかけたい」と話した。

来年2月にスタートする有償サービスの料金は、1人のヘルパーを依頼した場合、事務手数料2000円、ヘルパーへの謝礼2000円の計4000円。1人追加するごとに2000円上乗せされる。問い合わせ、申し込みはNPO法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター(0599・21・0550)。

NTT社員ら松山の施設で餅つき

愛媛新聞 2016年12月24日



NTT西日本愛媛支店とグループ会社の社員ら計11人が20日、松山市北吉田町の障害者福祉施設「つくし園」と「すぎな園」を訪問し、利用者や職員95人と恒例の餅つきを楽しんだ。

訪問は1990年から行っており、26回目。両園を運営する「松山手をつなぐ育成会」の岡部国男理事長は「餅つきを楽しんで今年の嫌なことは忘れ、来年をいい年にしましょう」と呼び掛けた。

NTT西日本グループ社員らが参加して行われたつくし園・すぎな園の餅つき

参加者は一緒にきねを持ち、周囲からの「よいしょ」の掛け声に合わせて、リズムよく餅をついた。社会福祉士などを目指す松山大の学生4人も初めて参加し、ゲームなどで会場を盛り上げた。

NTTビジネスアソシエ西日本四国支店(松山市)の和田恵充さん(62)は「今年も開催できてよかった。毎年楽しみにしていただき、社員も喜んでいる」と話していた。

パン工房など設備充実 県立の特別支援学校

読売新聞 2016年12月24日



パンづくりの実習ができる、校内の工房

◆来春開校予定

県は23日、来年4月開校予定の「県立岐阜清流高等特別支援学校」(岐阜市芥見南山)を報道陣に公開した。県内では初めての軽度な知的障害者を対象とする高等特別支援学校。各学年48人の生徒を受け入れ、従来の特別支援学校よりも高度な作業実習などを実施するという。

県の説明によると、生徒たちは工業、福祉、ビジネス・情報などの6コースから3コースを

選択して授業を履修し、接客や会計などを学ぶ専門教科で技能を身につける。在学中に資格を取得できるコースもある。

4階建ての校舎は、県が16億5000万円を投じ、岐阜城北高の旧藍川校舎を改修した。パン工房、食品加工厨房などもあり、実践的に学べる設備が整った。来年3月には、地元向けの内覧会も予定している。

県内では昨年度、特別支援学校高等部の卒業生の約6割が作業場などの福祉施設に就職し、企業への就職は約3割。県は新設校での教育を通じ、賃金が高くて社会的に自立した

生活を営みやすい企業への就職者の割合を上げたい意向だ。

児相増設へ支援マニュアル 虐待の対応強化、厚労省 共同通信 2016年12月24日

増加の一途をたどる児童虐待への対応強化を図る厚生労働省が、児童相談所開設に必要な手続きなどを示した自治体向けの支援マニュアル作成を進めていることが24日、分かった。児相は都道府県と政令市に設置が義務化されているが、設置が認められている中核市（47市）では金沢市と神奈川県横須賀市しか置いていない。法改正で来年4月以降は東京23区も設置可能になり、国として増設をサポートする構えだ。

児相は現在、全国に210カ所設置されている。国はよりきめ細やかな対応を進めるため、今後5年間をめどに中核市や東京23区への整備を支援する方針を打ち出している。

おもちゃ直して子に笑顔

読売新聞 2016年12月25日

壊れたおもちゃを修理し、再利用を図る市民団体「敦賀おもちゃ病院」（古江孝治代表）は来春、敦賀市内の幼稚園・保育所に壊れたおもちゃの提供を呼び掛ける「おもちゃ回収事業」を本格的に始める。修理後、希望する市内の福祉施設などに贈り、再利用してもらおう。古江代表が会長を務める県おもちゃ病院協議会に加盟する他の5団体にも同様の取り組みを呼び掛けるという。

「おもちゃー」

「わたしアンパンマンがいい」

クリスマスが近づいた22日、同市三島町の社会福祉法人白梅学園の一室に子どもらの明るい声が響いた。テーブルいっぱいに並んだおもちゃから、お気に入りや夢中で手に取る姿に、古江代表や修理にあたった会員らは目を細めた。

同園では経済的理由や虐待などで家庭での養育が困難な0～18歳の50人が生活。塩野宏副園長は「本当にありがたい。いただいた経緯を子どもらにも話して、大切にに使わせていただきたい」と感謝した。

寄贈されたおもちゃの電話や動く電車模型などは、敦賀おもちゃ病院が11月、市内の金山保育園の協力を得て回収、修理した46点のうち35点。修理ができない11点は部品を回収した。

回収事業は今年初めて行ったが、予想以上に集まったことから本格的に取り組むことに。古江代表は「家庭には多くの使わないおもちゃが眠っているが、施設では不足している」と話す。

同病院は2001年に発足。定年退職した技術者ら14人と、機材提供などで協力する敦賀工業高校が会員。毎週第1土曜の午後1～3時に市生涯学習センターで壊れたおもちゃを無料で修理している。問い合わせは古江代表（090・8264・0741）。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行